

Title	G.H.ミードとプラグマティズム : 時間論を基軸として
Sub Title	G. H. Mead and pragmatism : with special reference to the theory of time
Author	長尾, 真理(Nagao, Mari)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1983
Jtitle	哲學 No.76 (1983. 4) ,p.123- 147
JaLC DOI	
Abstract	In contemporary American sociology, many theories base themselves on George Herbert Mead's communication theory. However, his own theory has not completely analysed up to this day. This is because he was not a sociologist, but one of "the most original American pragmatists". Then we need to consider the inner relation between his theory and his basic philosophy, i.e. pragmatism. In this point of view, the purpose in this paper is to make the connection of them clear and to explain a significance of the present day on his communication theory. Making analyses of them, I intend to pay attention to a structure of "meaning" in his thought and to examine its problem from two points of view. The one is "time" and the other is "act", and both of them are important concepts on pragmatism. In these explanations, it will be clear that a communication process in his theory, that is symbolic interaction with "self" and "others", describes a constructing process of our everyday life-world, which is intersubjectively opened.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000076-0123

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

G.H. ミードとプラグマティズム

——時間論を基軸として——

——長 尾 真 理*——

G. H. Mead and Pragmatism

——With special reference to the theory of time——

Mari Nagao

In contemporary American sociology, many theories base themselves on George Herbert Mead's communication theory. However, his own theory has not completely analysed up to this day. This is because he was not a sociologist, but one of "the most original American pragmatists". Then we need to consider the inner relation between his theory and his basic philosophy, i.e. pragmatism. In this point of view, the purpose in this paper is to make the connection of them clear and to explain a significance of the present day on his communication theory.

Making analyses of them, I intend to pay attention to a structure of "meaning" in his thought and to examine its problem from two points of view. The one is "time" and the other is "act", and both of them are important concepts on pragmatism. In these explanations, it will be clear that a communication process in his theory, that is symbolic interaction with "self" and "others", describes a constructing process of our everyday life-world, which is intersubjectively opened.

* 社会学研究科博士課程 (社会学)

序

今日のアメリカ社会学における理論状況を概観するとき、とりわけ日常的な生活世界を立脚点とした理論の叢生が目を引く。相互主観的に「自明なるもの」として想定されて来た常識の世界を再び問い返そうとするこれらの諸理論に共通した試みは、しかしながら全く新たな問題領域として位置しているわけではない。例えば、アメリカのプラグマティズムの創成期における思想家達は、「社会」を人間が共同活動を遂行しそれを成就させる基礎的な＜場＞として捉え、更にそうした日常的な＜場＞の意味構造を、人間相互の行為連関から解明しようと試みていたからである。従って、アメリカ社会学においてここ十数年来隆盛が著しい「現象学」的諸傾向もまた、アメリカ社会学を根底で支えるプラグマティズムの問題領域と呼応するかたちで展開されて来たと言うことができるであろう。すなわち、アメリカの思想的伝統には、こうした日常的で且つ実践的なパースペクティブを受け入れる土壌が既に用意されていたのである。

さて、本稿ではそうしたプラグマティズムの思想家達の中にあって、とりわけ社会学理論の発展に大きな貢献を果たした G. H. ミード (George Herbert Mead 1863-1931) の理論を取り上げ、「コミュニケーション論」の観点から再検討を加えるものである。その際に、とりわけミード理論の中枢を占める「時間」や「行為」をめぐる問題設定を整理し、それがプラグマティズム的前提を有していることを明らかにしてゆきたい。そうすることにより、ミードが描出した「自己」と「他者」とのコミュニケーション過程が同時に相互主観的に開かれてある世界の構成過程として把握されるのである。

1. プラグマティズム——ミード理論の哲学的背景——

プラグマティズムは、その根底にフランシス・ベーコン (F. Bacon 1561-

1626) 以来の「経験論」の影響を色濃く残しながらも、アメリカという新たな土壌に根差し育まれた独特の「哲学」であった。周知のとおり当時のアメリカでは、産業革命の進展に伴い工業化や都市化、都市のスラム化といった急激な社会変動に見舞われており、また他方ではアメリカ建国の基盤であったピューリタニズムの生活信条と、産業革命によってもたらされた科学・技術を重視する合理的な行動様式との摩擦が著しくなっていた。こうした背景のもとでプラグマティズムは1870年代の初頭、ピューリタンの根拠地であるニューイングランドの一角で成立をみる。命名者は記号論の創始者の一人として現在注目を集めているパーズ (Ch. S. Peirce 1839-1914) であった。さてこのような成立の経緯は、当然のこととしてプラグマティズムの性質やその問題設定に大きく反映されて来る。つまり、宗教と科学との間の矛盾を暫定的に調停し、それによって産業活動の効率を高めるものとして、またそれと同時に産業化の過程で必然的に生じる諸問題に対処しうるような「哲学」として要請されたのがプラグマティズムだったと言える。このように、プラグマティズムの成立を歴史的にたどってゆく限り、それは確かに「資本主義を準備する力」として、また「資本主義を擁護する力」として捉えることができる。しかしそのことをもって、プラグマティズムを特殊アメリカ的なイデオロギーとみなすのはいささか性急すぎるであろう。何故ならば、「プラグマティズムはなんら特殊な結果を現わすものではなく、それはただ一つの方法であるにすぎない」(傍点引用者) (James, 1907, p. 31. 邦訳 p. 43.) からである。それではそもそも、哲学が固定した体系を持たず一つの方法としてのみ存在するとは、いったい如何なることなのだろうか。それを解く鍵は、プラグマティズムの独特な時間論の中にあると思われる。

プラグマティズムには、その成立背景とも相まって世界を一つの動態として捉えるという特徴がある。そうした観点に立つならば、世界は刻一刻と進歩しており、過去も未来も共に現在という時点から常に再構成されな

ければならないことになる。世界は進歩し科学もまた進歩する。我々が疑いえないと考えている日常生活の常識を出発点として知識を構成したとしても、その常識自体がまた常に過去のものとなり、批判と再吟味の対象となりうる。⁽¹⁾ その場合には「暫定的に物事を捉えてゆき後の訂正に応じる」という方法、あるいはそうした態度が常に要求されざるをえない。ここに「暫定的な整理を試みる」「折衷主義」としての方法（鶴見，1956, p. 283.）すなわちプラグマティズムの存在する場が与えられるのである。⁽²⁾ 従ってこうした調整機能を担うプラグマティズムにおいては、知識を特定の状況に結び付けることも、またそれを一定の観念体系とみなすことも共に斥けられる。つまり、知識は常に具体的な生活実践に関連した有効性において、すなわち実際の行為過程で経験的に確認できるものとして理解されるのである。そしてそれは結果的に、知識を実践に役立つ道具として捉える傾向（デューイ（J. Dewey 1859-1952）の「道具主義」）へと道を拓くことになるわけである。とはいえいずれにせよここでは「知識は行為の一部である」（MT, p. 351.）とするプラグマティズムの基本的なパースペクティブを押えておくことが肝要であろう。それは多様な側面を持つプラグマティズムに通底する、いわば最大公約数的な考え方なのである。⁽³⁾

さて、プラグマティズムの成立の基礎となった社会状況をひとつとおり概観し、その「時間」と「行為」をめぐる独特な見解を明らかにして来たわけだが、それでは思想史的にはそれはどのような背景を持って成立したのだろうか。

プラグマティズムの成立に先立つ十年程前、その後の思想界、更には文化一般にまで多大な影響を及ぼすに至った一冊の書物がイギリスで刊行されている。ダーウィン（Ch. Darwin 1809-1882）の『種の起原』（1859）である。産業革命を世界に先がけて経験し、既に産業資本主義の成立をみていた当時のイギリスの社会状況を背景として、「進化論」は従来の宗教的人間観を大きく覆しながら着実に社会へと浸透していった。そしてイギ

リスに1世紀あまりの遅れを取りながらも独自の産業化を強力に押し進めていたアメリカにおいて、それはまた大きな反響をまき起こす。こうして「進化」思想は、同じ社会状況に根を置くプラグマティズムの成立の起動力として大きく貢献したのだった。先に指摘した世界の進歩や発展といったプラグマティズムの捉え方には、「進化」思想からの直接の影響がうかがわれる。しかし「進化」思想がプラグマティズムに対してもたらした最も重要な視点は、進歩を有機体と環境との絶えざる適応過程とする捉え方であった。ジェームズ (W. James 1842-1910) はそれを人間の活動の神経組織をとおした反射作用とみなし、またデューイは刺激と反応を環境に対する「調整」機能と考え、「機能心理学」の先がけをなした。他方においてこの「個体と環境との相互関係」といった視点を独自の「相互作用論」へと彫琢していったのがミードだったのである。意識の機能性を重視したジェームズやデューイとは異なり、ミードの関心は「思考と行為との関係」に向かっていた。次のようにミードは考えた。個体は環境、すなわち「外的世界 the world that is there」を行為をとおして選択するのである以上、この選択過程を、つまり対象との経験的な相互作用を内面化したところに思考が現われるはずだ。従って思考はどんな場合にでも「行為の内側にある」(MT, pp. 344-345.)。こうした捉え方を採用する限り、環境=客観的世界 (ミードの用語で言えば「外的世界」) やそれを構成する諸対象は決して固定された存在ではなく、行為 (それも思考を必然的に伴った行為) との連関で常に多様な変化を示すものとなる (この点はプラグマティズムの意味論を考える場合、特に重要である)。以上のように「進化論」こそが、環境に対する適応能力を核として行為の重要性をプラグマティズムの思想家達に認識させる契機となったのである。

このプラグマティズムの土台とも言える「進化」思想を、ミードは更に次のように展開させてゆく。彼の『19世紀における思想動向』⁽⁴⁾によれば、「進化論」の中心的問題を一般化することによって引き出される哲学的原則と

は次のようなものであった。それはまず、ロマン主義的観念論者の見解への批判の中で明らかにされる。この観念論者の「主体なくしては客体はありえない」とする主張に対してミードは、環境=客観的世界の存在をまず認める。その上でその客観的世界が個体の行為に依存する点に着目して、「客体は主体を含み、同時に主体は客体を含む」というテーゼを立て、この全体に「自我」^{セルフ}の概念を適用したのだった (MT, pp. 166-167.). この視点を基礎に彼は更に、「他者を含むことにおいて自己自身と一致する」というヘーゲル (G. W. F. Hegel) の見解を援用し敷衍しつつ、「一般化された他者 generalized other」という概念を媒介に他者を「社会」と結び付け、そこに独自の「社会的自我論」を結実させる。個体が自我を獲得するためには「彼が所属する社会集団の構え^{アティテュード}を取り入れ」なければならない、言い換えれば「自己になるためには彼は社会化されなければならない」のである (MT, p. 168.). ところでこうした結論に達したミードは、プラグマティズム自身が依拠する「科学」 (= 調査科学) に対し次のような意義を与えるに至る。すなわち「仮説の働きによってそれを吟味する」 (MT, p. 351.) 「科学」の帰納的推理とは、社会に生起した「新たな事柄に対して自らを絶えず適応させる方法」 (傍点引用者) (MT, p. 290.) に他ならないのである。こうした「科学」の意義付けは、先の「進化論」から導かれた「時間」や「行為」の理論と一致するところでもあろう。そしてミードによれば、「思考や知識^{コンダクト}を行為の内側に持ち込む」このプラグマティズムこそ、優れて実践的且つ日常的な哲学であることになる (MT, pp. 351-352.). 先にプラグマティズムが「進化」思想を背景として成立したものであると述べたが、ミードは更にそれを展開させて、以上のような「科学」への意義付けを行なうに至るのである。従ってこの「科学主義」こそとりわけミードのプラグマティズムを特徴付けるものと言えよう。

このようにしてミードはプラグマティズムを理論基盤に据えた上で、更に社会過程を重視する自らの立場を「社会的行動主義 social behaviorism」

と名付け、従来のワトソン (J. B. Watson 1878-1958) 流の「行動主義」理論に対する批判を明確に打ち出そうと試みたのだった。次章ではこの「社会的行動主義」理論を中心に考察を進めてゆくことにしよう。

2. 「社会的行動主義」——ミードの

コミュニケーション論——

ミードの「社会的行動主義」が「主体-客体」を二元論的に切断するのではなく、互いに他を含みながら進行する過程とみていたことは前章で明らかにした。そうした理解は認識論的レベルで言えば、従来の实在論や観念論を共に否定する立場にあたる。今日の社会科学論の脈絡に置き換えるならば、ミードはいわば「方法論的客観主義」と「方法論的主観主義」との双方を統合しうる理論の確立をめざしていたと言えるだろう。少なくともミード自身はそうした意図を持っていたのである。そしてその解明にあたっての「基礎的素材」を彼は「内的及び外的側面」を合わせ持つ「動作」に求めた (MSS, pp. 7-8. 邦訳 pp. 9-10.). つまり「動作」を研究対象とすることは、個人主体説に基づいて行動を生物学的な本能から説き明かそうとする「本能心理学」への批判と、行動を観察可能な「刺激-反応」図式によって機械的に説明することに終始したそれまでの「行動主義」つまり「ワトソニズム」への批判とを二つながら含み込んでいたのである。さて、こうした当初の目論みにもかかわらず、ミードの「社会的行動主義」は究極的には主観主義的立場へと収斂してゆく。その中で「社会」は一種の「共同体」へと切り詰められ、更には「社会的現実を人間の『主体性』においてしか見ない」(佐藤, 1972, p. 184.) とも批判される理論へと転化してゆくのである。その原因を、ミードのオプティミズムやそうした理論設定を可能にした社会的基盤（すなわち「相対的好況期」のシカゴ・コミュニティ）に求めることも確かに可能ではあろう。しかしそうした批判にはしばしば問題の核心を取り落とす危険性がある。先に指摘したミード

理論の問題点を解明するためには、我々は彼の「社会的行動主義」を支える哲学=プラグマティズムに再び立ち戻り、検討を加えなければならないと思われる。ミード理論が抱える問題点の考察を行なうために、ここではまず「社会的行動主義」理論の主要点とその基礎について明確化しておきたいと思う。

ミードの「社会的行動主義」における「動作」^{アクト}の研究は、観察可能な個体の行為反応から出発し、その内的意識に至るまでのトータルな人間の能力を子供の社会化と重ね合わせることに於いて分析するものであった。その際、個体に対して行為や意識を触発する装置として働くのが「シンボル symbol」⁽⁵⁾である。そして、このシンボルを媒介とした他者との、あるいは社会的諸対象との相互作用過程こそが「コミュニケーション」と呼ばれるものなのである。⁽⁶⁾この「コミュニケーション」をとおして個体は社会化を果たし、また「コミュニケーション」の直中で自ら相互作用の一般構造を再生産し、維持してゆくのである。従ってミードの「社会的行動主義」理論は、「コミュニケーション論」として展開されていると言えよう。そしてこの「コミュニケーション論」は先にも指摘したとおり、社会化すなわち個体発生^{発生}の視点から説き起こされてゆくのである。

ミードはまず、その大部分がまだ仮説の域を脱していないことを認めた上で、「動作を組織化する中枢神経系内の変化」の説明を試みる(MSS, pp. 11 ff. 邦訳 pp. 14 ff.). 個体が「動作」を行なうためには、まずその行動の端緒が開かれていなければならないからである。行動の端緒にあたる先の変化をミードは「構え attitude」とみるが、それは有機体が環境の中にある刺激を選択し、それに対して試みる適応である。この適応能力を基に相互作用、つまり「コミュニケーション」が成立するわけだが、そうした「コミュニケーション」の原初形態をミードは「身振り gesture」を媒介とする相互作用にみている。つまり、社会過程の「基礎的メカニズム」は、個体の「身振り」の中に存在するというのである。ところでそのメカ

ニズムとは、「はじめの有機体の運動」が「第二の有機体に社会的に適切な反応を呼び起こす特定の刺激として作用している」（傍点引用者）（MSS, ibid.）ところにある、とミードは主張する。この観点からは、単なる「身振り」から「有声身振り vocal gesture」への移行において、特に注目すべき事態が生じている。というのも「有声身振り」によって、身振りをする個体自身が自らの声に触発されて、他者が反応するのと同じ反応を自らに呼び起こすことが可能となるからである（MSS, p. 67. 邦訳 p. 74.）。だが、反応とは「身振り」が刺激となってそこから直接導き出されるものではなく、当該の「身振り」に対する受け手の解釈をとおしてはじめて成立をみるものである。そうであるならば、「身振り」を行なう人間はその「身振り」が他者に対してどのような刺激となり、また彼がそれに対してどのように反応するのかといった知識をあらかじめ持つ必要があるだろう。言い換えるならば、自らが他者の視点を取り入れ、他者の立場から自己を捉え返す反省の能力を、当の人間は持っている必要があることになる。ミードはこうした能力を「反省的知性 reflective intelligence」と名付け、「精神 mind」の特質として人間を他の生物と峻別⁽⁷⁾しうるところと考えた（MSS, pp. 90 ff. 邦訳 pp. 99 ff.）。この「反省的知性」が担う解釈活動をとおして「身振り」は人間集団に共通した反応を呼び起こす「シンボル」へと転換する。つまり、「シンボル」とは、相互作用を行なう者に対して「反省的知性」を介して前もってそれに対する反応が与えられている一種の刺激だと言うことができるだろう。そしてその「シンボル」の典型的な形態として挙げられているのが「言語 language」なのである。つまりミードによれば「言語」とは、それを使用する諸個人に「有意味性」を指示し、更に合理的な行為へと導く装置ということになる（MSS, p. 122. 邦訳 p. 133.）。そしてミードは、この「言語」を媒介とした相互作用が個人に内面化されるところに、「思考」が成立するとみる。そうであるならば、「思考」はその根底で「身振り」を媒介として他者・社会的諸対象との相

相互作用を常に既に前提していると言えよう (MSS, pp. 141-142. 邦訳 p. 151.). 「思考は常に行為の内側にある」というミードの先にも触れたテーゼは、このことを意味していたのであった。

以上、「言語」の成立に至る「社会化」過程を概観したところで、それらに整理を加えておくことにしよう。(1) 個体はまず、環境に対する適応メカニズムとしての「構え」を基に「身振り」を媒介とした相互作用段階を迎える。「身振り」はただそれを交す個体相互間において有意味であるにすぎない。(2) 次に一定の社会共同体において承認された「有意味シンボル」を媒介とする相互作用段階へと移行する。「反省的知性」の発達がそのメルクマールと言えらるだろう。ここでは「シンボル」は既に当該の集団に共通する行為との連関で一定の意味が付与されており、彼等に共通の反応を呼び起こす装置となっている。(3) 「言語」を媒介とした相互作用段階。(2)の段階の完成形態としてそれを内面化した「思考」能力が確立され、それに基づいて個体は合理的行動へと動機付けられるようになる。とはいえ、実際にはミードは(2)と(3)の間の、すなわち「言語」への移行段階についての詳細な検討は行っていない(この点については後で取り上げる)。だがいずれにせよ、個体はこの「コミュニケーション」能力、すなわち社会的相互作用を円滑に遂行する能力を獲得するのと並行して、「自我」を確立するのである。

ところで、以上の「言語」成立段階を「自我」の発達段階に重ね合わせると、(1)は「^{プレイ}遊戯」(2)は「ゲーム」の段階に各々対応している(MSS, pp. 152 ff. 邦訳 pp. 164 ff.). (1')「^{プレイ}遊戯」は幼児が模倣能力をもって特定の社会的動作を組織化する段階であり、(2')「ゲーム」は更に「他者」の役割の要素を取り入れ、他者の観点から自己を観察できるようになる段階とみなされている。これが「反省的知性」の萌芽であることは言うまでもない。(3')以上の段階を経て子供は彼が所属する集団の態度を理解し、組織化し、更に一般化することによって形成された「一般化された他者」

の立場から自己を捉え返す能力を得るに至る。この「一般化された他者」の態度とは、ミードによって「全共同体の態度」と等置されるものである。そしてそれを内面化すること、すなわち組織化された所与の社会全体を個人の経験領域内に持ち込むことが「自我」の完成と維持とに対して不可欠だと考えられている。ミードはこの「一般化された他者」の役割を取り入れ、それを自ら再構成する「自我」の側面を「me」として、「自我」の静態的・受動的側面を現わすものとみなした。つまり「me」とは、「一般化された他者」によって表象された社会的世界が「自我」に直接投影された部分と言えるだろう。つまり個人は、自我の「me」という側面をもって他者との「同一性」を獲得しうるのである。それ故、個体が社会化の過程で「一般化された他者」によって象徴される社会的世界を内面化することが、人間主体の確立にとっての前提条件だと言えるわけである(MSS, p. 178. 邦訳 pp. 190-191.)。とはいえミードは「自我」を単なる「me」に留まるものと考えたわけではない。「自我」には更に「me」とは区別され、いわば「me」を解釈する心的行為を行なう側面が存在する。これが「I」である。「I」は「自我」の中であって自由や自発性・創造性などを担っており、従って我々はそこに各人に固有な体験の総体としての主観的世界、すなわち他者との「非同一性」の起点をみることができる。

本章では、以上のように「言語」の成立とそれに伴う「自我」の発達過程とをひとつとおり明確化して来たわけだが、双方の根底に位置する「コミュニケーション」過程について、とりわけそこで通用している意味の問題についてのミードの考えを最後に確認しておきたいと思う。

ミードにとって、「コミュニケーション」における意味とはあくまでも社会的動作の構造の中で、つまり「シンボル」とそれに対する適応的反應との連関において捉えられるものであった。ミードはこの社会的動作の中から3つの基本的な構成要素を抽出し、その三対の関係を意味の基盤と考えている。①「ある個体の身振り」、②それに対する適応反応としての

「第二の個体の身振り」, ③そして「はじめの個体の身振りから始まった一定の社会的動作の完成」という「三対の関係」がそれである (MSS, p. 81. 邦訳 p. 89.). つまり, ミードによればこれらの間の関係こそが, 「意味が発生し, そして存続する領域を構成する」意味母体ということになる (MSS, p. 76. 邦訳 p. 84.).

このようにミードは行為者相互の「身振り」とそれが他者に呼び起こす行為反応との関係において, いわば行為者自身によって意味の同一性が確保されうると考えている. それに加えて彼は, この「身振り」という概念を広義に捉えており, 従って先の「意味の三対の関係」はそのまま「有声身振り」や「言語」にまで適用しうるとみなされている. 筆者のみるところでは, ここにミードの「コミュニケーション論」の重大な問題点が伏在している. つまり, 以上のような論では行為者間の「シンボル」の交換能力に支えられた素朴なコミュニケーション形態が, 無媒介に「言語」あるいは「思考」領域にまで適用されていることになってしまうのである. このことは, ミードが「シンボル」と行為反応との連関でしばしば用いる「呼び起こす call out」という用語の曖昧さとも呼応して, 彼の理論の更なる問題点を浮かび上がらせることになる. こうした問題点について, 次に章を改めて検討してみたい.

3. ミード理論における意味と行為

——時間論を基軸として——

ミードが彼の「コミュニケーション論」において意味の母体とみなした「三対の関係」は, 実際の情況とどのように対応しうるのだろうか. 次にそれを, 森の中で熊の足跡を発見するという事例⁽⁸⁾をもとに検討することにしてしよう.

森を散策している途中, 地面に真新しいくぼみを発見した人は, それを熊の足跡と解釈し, 近くに潜んでいるであろう熊に襲われはしまいかとい

う恐怖心から急いでもと来た道を引き返そうとするだろう。その場合、行為の端緒にあって他者の反応を引き起こす役割を果たすのが、①'地面に残された真新しいくぼみである。そのくぼみは、②'発見者に対して恐怖心と呼び起こし、③'そして彼は、その場から逃げ出そうとするのである。ミードの説明に従うならば、以上のような一連の行為連関が現われるであろう。しかしここで注意しなければならないことは、発見者が恐怖心を抱いているのは単なるくぼみそれ自体にではなく、彼がそのくぼみから反省的に解釈した「熊」に対してなのだ、ということである。つまり、くぼみが象徴している「熊」が発見者に恐怖心と呼び起こすのである。従って彼は、暗黙のうちに地面に残されたくぼみを「熊」に、それも人に危害を加える凶暴な動物としての「熊」に結びつけていることがわかる。しかしこうした発見者の解釈過程は、実はミードが示した先の「三対の意味母体」において、くぼみによって象徴された熊から恐怖心が呼び起こされる、とする説明にそのまま従う限り曖昧にならざるをえない。この説明に欠如している視点は、まず地面に残されたくぼみが「熊」の足跡と同定されることが必要であるということ、またそれに伴って「熊」の一般的形態が発見者に既にイメージされていなければならないということである。つまり他者の反応と呼び起こす「シンボル」に代わって、「シンボル」によって反省的に解釈された事物——先の例によれば「熊」——が言語的に把握されていること、そしてそれに伴い指示対象の一般性——すなわち「熊」という動物の形態や習性等々——が人々に認識されていなければならないのである。このように対象が一定の「言語」によってその一般性において表象されることによって始めて、それに対する人々の解釈が同一であること、そしてその解釈から導出される行動の方向性が一定であることが各々保証されうるのである。従って、先の例で地面のくぼみが発見者に恐怖心と呼び起こし、その場から逃げ出そうとする理由を論理的に解明するためには、対象を言語的に捉えることが不可欠となる。しかしミードが言う「シンボ

ル」には、そもそも「言語」が担うような指示対象の一般性を表示しうる機能は含まれていない。ミードは「シンボル」を、他者の反応を呼び起こす刺激として理解しているにすぎないからである (MSS, p. 181. 邦訳 p. 193.).

以上のような結論は、ミードが使用する意味での「シンボル」によって「コミュニケーション」を論じることがそもそも不可能だということを示しているように見えるかもしれない。しかしながら、ミードは指示対象の一般性を表示しえない「シンボル」を用い、それを先の「三対の意味母体」に組み込むことのみによって「コミュニケーション」を説明しているのではない。彼の「コミュニケーション論」には、更にそれを支える前提があると思われるのである。結論を先に言うならば、この前提とはミードの理論を貫くプラグマティズムそのものなのである。この点を明らかにするために、先の「熊」の例に立ち戻って彼の説明を再検討してみよう。

まず、熊の「シンボル」である地面のくぼみ=足跡が、(a) 発見者の恐怖心を呼び起こすと同時に、(b) その場から引き返そうとする行為を反射的に引き出していたことを想起してみよう。これによって、発見者は「シンボル」から単にそれに対する (a) “反応の構え” だけではなく、(b) “反応の結果” をも同時に呼び起こしていることがわかる。ところでこの (a) “反応の構え” とは、個々人や一定の集団内に蓄積されて来た過去からの日常的な経験に基づく知識に依存していることは明白であろう。ミードはこのことに関連して次のように述べている。「我々の過去は我々の経験の結果」である。すなわち「人間の過去は人間が行動を起こす能力の中に恒常的に存在している」。この意味において過去は常に「現在の世界において」見出されうるものなのである (以上傍点引用者) (MSS, p. 116. 邦訳 p. 125.). 更に (b) 「シンボル」による “反応の結果” とは、未来のイメージのことだと言うことができる。言い換えるならば、基本的には環境に対して如何に適応しうるか——例えば熊に襲われる危険から如何にして免れうるか——といった未来の状況に、現在にある行動は密接に係わり

合っているのである。これらを総合すると、当該の時点で用いられている「シンボル」には、特定の状況における過去の経験の総体と未来へ向けてのイメージとが、二つながらに凝縮されていることが明らかになるだろう。そして人間はこの「シンボル」を「反省的知性」をもって解釈するのであるから、この「反省的知性」とは「本質的に過去の経験に基礎を持つ未来の可能な結果との関連で、現在の行動の諸問題を解決する能力」(傍点引用者) (MSS, p. 100. 邦訳 p. 108.) と言い換えることができるのである。こうして、ミードが論ずる「コミュニケーション」すなわち「シンボル」を媒介とした相互作用は、過去-現在-未来という「時間的秩序」において理解されなければならないことが明らかになったのである。

以上のことからわかるように、ミードの時間論の特質は、人間が「シンボル」を使用することにおいて過去を再構成すると同時に、現在との連関で未来を既にイメージしているというところにある。つまり過去からの経験の蓄積と未来のイメージとは、現在において行為する我々にとっての不可欠な構成要素なのである。しかしここで改めて確認しておかなければならない点は、それらのイメージが行為の一義的な決定要因としてではなく、あくまでも現在使用している「シンボル」を一定の状況下で適切に機能させ、更には人々の間に同一の意味を導き出すための手続きとしてのみ有効性を持つということにある。すなわち、あくまでも「現実^{リアリティ}は現在の中に存在している」(PP, p. 1.) のであって、過去や未来は共に現在という視点からはじめてその方向性や意味内容を付与され、またその位置価が確定されうるのである。「過去(あるいは過去の有意味的構造)は、未来と同様に仮説的」(PP, p. 12.) なのである。そして、人間は現在におけるパースペクティヴから未来を基礎付けるべく、常に「過去のプロセスを仮説的に再構成」(PP, p. 22.) してゆく。つまり、過去と未来は共に「現在に属し」現在によって「批判されまたテストされる」と言うことである(PP, p. 88.)。このようにミードにあっては、過去から未来に至る時間系列は、人間に対

して外在的で客観的に把握しうる「物質的世界の内的特質」としてではなく、あくまでも「主観的な現象」として、すなわち人々によって経験された時間として捉えられている点を押えておくことが肝要であろう。まさしく時間は、「現在の行為において構成される」(Joas, 1980, s. 187.) のである。⁽⁹⁾ こうした過去と未来との、現在における暫定的調停を試みる「現在の哲学」⁽¹⁰⁾ が、すなわち発展する社会にあって従来の世界観と来たるべき世界観との調停を目ざすプラグマティズムと同定されうることは、もはや疑う余地がないだろう。⁽¹¹⁾

さて、このようにして「シンボル」は、社会の成員相互の行為によって貫かれた過去の経験と未来のイメージとを内に含むことを己れの有意味性の前提とし、またそれをとおして行為調整力を獲得するものである。こうして基礎付けられた「シンボル」こそが、一定の社会集団の成員に対して共通の反応を呼び起こすことを可能とするのである。このように、現在という〈場〉にあっては当該の「シンボル」が呼び起こす行動の方向性が一定となる。この行動の方向性が同一であることを基盤として、また逆に「シンボル」の意味の同一性そのものを保証するような「社会的行動の〈場〉」がここに成立する。ミードが彼の「コミュニケーション論」を展開するにあたって暗黙のうちに前提していた理論こそ、このプラグマティックな〈場〉の理論だったとみることができよう。従ってミードの、「意味の同一性とは、『シンボル』が呼び起こす社会的成員に共通した反応である」とする主張を我々がとりあえず認めたとしても、彼が提唱した「三対の意味母体」だけではやはり不十分なのである。すなわち、それと共に共通の反応を呼び起こすための「社会的な行動の〈場〉」が確保されているというそのことが、最後の条件として付け加えられるべきだったのである。しかしミードはこの前提を除外した。あるいは既にして、そのような条件付けの必要が認められない程に、このプラグマティックな〈場〉の前提と彼の理論とが一体化していたとも言えるだろう。ともあれ我々が彼の「コミ

コミュニケーション論」を解明する場合にはプラグマティズム自体の分析が如何に不可欠であるかが、以上のことで明らかになったのである。

このミードの〈場〉の理論の特質を別の観点から明らかにするために、更に、以上のような現在の行為との係わりにおいて捉えられた「シンボル」の意味と、当該の「シンボル」によって表象される諸対象との関係について、彼の議論を検討してみることにしよう。

第1章でも指摘したとおり、ミードは人間を以て環境、すなわち客観的世界を、行為によって選択的に知覚する能力を備えた存在者とみていた。つまり、個々人によって経験される環境は、個々人の行為の変化に応じて必然的に変形され、それ故環境を構成する諸事象もその意味内容の不断の再構成を被るのであった (PA, pp. 159-165.)。ミードによれば「物質的对象とは、自然への社会的反応から我々が作り上げた抽象」(MSS, p. 184. 邦訳 p. 196.) にすぎない。つまり、一定の「行為が諸事象の出現に先行」し、経験の領野の中で「行為によって方向付けられる」ことにおいてはじめて対象として現前するというわけである (PA, p. 166.)。このことに関連してミードは更に、自然的諸事象や環境の再構成に、人間の身体 (すなわち手) が大きな役割を果たしていると指摘する (MSS, p. 248. 邦訳 p. 263.)。つまり、ミードは対象を構成するものとしての身体の重要性を既に認識していたとみることができる。ミードはそうした手の使用が、「有意味シンボル」としての言語と共に人間に固有な「反省的知性」の発達にとって重要だと考え、その使用能力もまた子供が社会化を遂げる過程で獲得されるはずだ、と主張する (MSS, p. 237. 邦訳 p. 250.)。言い換えるならばミードは、環境や対象といった客観的世界に対する知覚も含めた人間の係わりはまた優れて社会的な反応だ、⁽¹²⁾ と言うのである。子供は社会化の過程で「一般化された他者」の役割を取り入れ、一定の社会内で妥当性を持つ規範的現実=社会的世界を内面化するが、それと同時に彼は、対象世界=客観的世界の構造に関する社会一般で認知されている了解をも獲得する。これは

いわば、社会における「共通感覚」の成立過程として捉えることができる⁽¹³⁾。ミードは、こうした過程を経て社会的自我が確立されると考えていた。従って、自我形成に関するミードの論究の主眼点は、先行する社会過程の中にあって個人が如何にして成立し、また彼の能力が如何にして機能するのか、という点を解明するところにあったと言えるのである。ところでその社会的世界とは、前章でも明らかにしたとおり、自我の領域に内面化され「me」の側面として顕在化する。この「me」はまた、「I」という人間の主観的世界（すなわち他者との「非同一性」）を形作るための基盤でもあった⁽¹⁴⁾。以上の事柄を総合すると、ミードは、人間が社会的世界という一定の〈場〉に依拠することにおいてはじめて知覚対象である客観的世界、及び彼固有の主観的世界を獲得しうる、と考えていたことが明らかになる。言い換えれば、社会的世界の中に人間の能力や可能性のすべてが潜在的に包絡されているということである。つまり、ミードは彼の「コミュニケーション論」をとおして、この社会的世界すなわち「客観的世界と主観的世界とが交錯する意味構成の〈場〉」の内的構造を分析したと解釈することができる。自己を自己として意識させる他者の存在と、「役割取得」のメカニズムに基づいた自己と他者との相互性とを明らかにすることにおいて、ミードはコミュニケーションの構造を、つまり相互主観的な〈場〉の構造を解明したのであった。これが先の「行動の方向性」が同一であることを維持するための「社会的行動の〈場〉」を指していることは、もはや指摘するまでもない。

4. 結 論

ミードは、意味の同一性の基盤を、「一般化された他者」との役割交換に基づく行為期待の相互性と、更にはそれをも基礎付ける行為者間の相互承認——すなわち主体相互の「同一性」と「非同一性」の確立——とに求めた。すなわち彼は、意味構造を相互作用体系の属性として理解したので

った。そのメルクマールが、行為調整力を備えた「シンボル」にあったことは、先に指摘したとおりである。従ってミードは以下の諸問題の解明を自己の中心的課題としていたとみることができる。すなわち、「言語」に先立つ段階にあって如何にして「身振り」から「シンボル」が生じるのか、そしてその「シンボル」を媒介とすることによつて如何にして素朴な反応が相互主観的に承認された意味習慣へと結び付きうるのか、という点の解明がそれである（これは同時に人間の主体性の確立と、それと相即した社会の進化過程を解明する道でもあった）。以上のようにみるならば、ミードの「コミュニケーション論」とは相互主観的に妥当性を持った経験構造の分析、すなわち「言語」を媒介として言語規則に規制された行為の基盤としての、メタ・コミュニケーションの分析であったと行うことができる（Habermas, 1975, s. 333. 邦訳 p. 73.）。

ところで、成員の行為によって支えられる相互主観的な意味構成の〈場〉は、過去と未来の共同性をも含み込んだ優れて時間的な〈場〉であった。すなわち、現在¹⁵は、「通り過ぎた」過去¹⁶の経験によって構成された「行為の領野」において、「来たるべき経験」（PA, p. 65.）へと方向付けられた行為過程の中に現われる（PA, pp. 347-348.）。すなわち現在¹⁷は、過去と未来との相互作用の過程で結実をみる。従って、ミードが論ずる「相互作用」過程は、他者との共時的なレベルでの相互性と共に、時間レベルでの通時的な相互性とによって構成された、いわば通時的-共時的な過程として捉えることができるのである。このような構造を持ち、究極的には行為という日常実践によって貫かれた共通の世界、すなわち一定の生活様式を備えた生活世界において、個々人は常に既に共同化された存在として現前する。そして、個々人に対して自明性と親和性を備えたこの世界を、ミードは最終的には理想的な社会共同体へと収斂してゆく存在とみなしたのである。それは人々の「反省能力」に依拠しつつ、漸進的に到達可能な未来社会である⁽¹⁵⁾。

さて、今述べたことから明らかなように、自らの行為を反省する能力は、ミードによってさして深刻な状況との関連で論じられているわけではない。行為自体が日常的な状況との適応過程として捉えられ、それに対する反省作用が日常世界への過度の信頼観と親和性との結び付けられている限り、人間の反省能力は緩慢な社会進化を保障する力にはなりえても、自覚的な変革の推進力とはなりえないだろう。それ故、ミードが一貫して人間の実践レベルの問題を追求しながらも、結局それが「経験構造」の分析という人間と社会との内的な構成連関に関わる理論へと収斂せざるをえなかった理由が、この状況への「適応」のメカニズムという彼の視点の中に求められるように思うのである。とするならば、状況への「適応」というプラグマティズムを貫く「進化」思想の中心概念こそが、「実践」をめぐる諸問題から批判的な視座を切り捨ててしまったということになろう。ミードの理論は、知識と行為との内的連関の過程を明確化し、また新たな創造の契機を諸個人の「反省的知性」の中に求めるものであったが、結局それが全体としては、社会と諸個人間の動的な分析にまでは至らなかった理由が以上の点にあったと思われるのである。

こうしたミードの理論の問題点について、本稿ではもはや立ち入って検討を加える余裕はない。ただ筆者としては、ミードが（第3章で触れたように）分析を尽くしてはいない「言語」にこそ、批判的反省の基盤があると考えている。⁽¹⁶⁾ この視点からすれば、ミードの学問的作業の意義を以上のように認識した我々は「コミュニケーション」の次のレベルへ、すなわち相互主観的な妥当性を備えた言語規則に基づく「コミュニケーション行為」の理論へと進む必然性を持つことになるだろう。「言語」による「反省」は、環境への適応を導くのではなく、状況に対する批判的認識への契機となりうるはずである。こうした諸問題については、後日稿を改めて検討することとしたい。

註

本文中の引用文献については、引用後の括弧内に、著者名・刊行年次・引用された原文の頁数、の順で記し、翻訳のあるものについてはその後に邦訳書の頁数を付記した。書名は本稿の最後に一覧された参考文献の刊行年次に依っている。またミードの文献に限り著者名・刊行年次の代わりに書名の略語を用いた。略語が示す文献は次のとおりである。

PP: *The Philosophy of the Present*

MSS: *Mind, Self and Society*

MT: *Movements of Thought in the Nineteenth Century*

PA: *The Philosophy of the Act*

SW: *Selected Writings*

なお、訳語・訳文については筆者の見解によって適宜修正を加えた。

- (1) こうした観点に立つならば、「常識」は哲学の出発点であると同時に科学的な批判に対しても常に開かれた存在となる。パースはこれを「批判的常識主義Critical Common-sensism」(Peirce, 1905-b, p. 305. 邦訳 p. 247.) と呼んだのだった。
 - (2) ミードはプラグマティズムが担う問題を次のように書き記している。「今日の哲学の課題は、近代科学の主題である決定の普遍性と、新たなるものの出現とを相互に調和せしめるところにある」(PP. p. 14.).
 - (3) プラグマティズムを行為と結び付けて理解したのはジェームズ (W. James) であった。プラグマティズムの命名者であったパースは、「プラグマティズム」という用語をカント哲学における「プラグマターティッシュ *pragmatisch*」という概念を基に作り出した。因にカントによれば「プラグマターティッシュ」とは「プラクティッシュ *praktisch*」に対応する概念であり、前者が経験的原理を基盤としていたのに対し後者は純粋理性の理念のみを基礎としており、「モラーリッシュ *moralisch*」と同定されうる概念と捉えられている。従って経験領域における認識と目的の結び付きを強調するパースは、カントの「プラグマターティッシュ」という概念に自らの立場を投影したと考えられる (Peirce, 1905-a, pp. 273-274. 邦訳 pp. 221-222.).
- 一方ジェームズは、パースがカント哲学の用語から導いたこの用語を、ギリシア語の「プラグマ *πράγμα*」(=行動, 行なわれたこと, あいだがら) と結び付けることによって、行為を重視する観点を打ち出したのだった (James, 1907, pp. 28-29. 邦訳 p. 39.). このような立場に立つならば、従来のプラグ

マティズムの訳語であった「実用主義」を排し、「行為主義」が適切だとする指摘（鶴見，1946, p. 100.）にも根拠があると思われる。

- (4) 周知のとおり実際にはミードは生前一冊の著書も出版していない。従って後に刊行されたミードの代表作は、弟子達が彼の未発表の草稿や講義ノートを基に作り上げたものである。『19世紀における思想動向』は、社会における科学の位置や、哲学と社会心理学の連関等を思想史的脈絡の中で論じたものとして特異な論集である。
- (5) ミードが使用する「シンボル」という概念は、パースの記号論における「シンボル」とは異なる意味で用いられている点に注意しておきたい（パースは記号を「アイコン icon」「インデックス index」「シンボル symbol」とに分類し、その中で「シンボル」は他の記号と異なって記号内容との有縁性を持たないものと定義されている）。
- (6) このように、ミードの相互作用が他者のみならず物的な諸対象との間にも交されうるという点は、後に客観的世界に存在する事物の認知の問題とも絡んで重要な所である。
- (7) 従って相互作用を行なう者は、自己の行為に対して他者がどのように反応するかを前もって予測することができるし、また反応する側でも相手が如何なる反応を期待しているのかを、彼の「身振り」からあらかじめ理解することができる。これは一般に「期待の相互性」と言われており、相互作用の定常状態を維持するためのメカニズムである。
- (8) これは、ミード自身が挙げた例を基に筆者が整理したものである (MSS, pp. 120-121. 邦訳 pp. 128-130.)。
- (9) ミードはこうした時間論をベルグソン (H. Bergson 1859-1941) の時間論の限定付けと修正とによって導き出している。詳細は The Philosophy of the Present, pp. 292-325.; Selected Writings, pp. 345-354. など参照。
- (10) 『現在の哲学』は彼が「時間」について論じた書物の 標題でもある。これはまたミードが書き残した唯一のまとまった草稿だと言われている。
- (11) H. ヨアスはミードの時間論を解説した “Zeitlichkeit und Intersubjektivität” という論文において次のような指摘を行っている。すなわち「過去の哲学」は「機械論的決定論」に基づく「世界像」に係わるが、それは「自然科学的研究実践」によって防止されねばならない。また「未来の哲学」は「目的論的決定論」に基づく「歴史哲学」に係わるが、それは「歴史科学的研究実践」によって回避されねばならない。そしてこの双方の総合をねらったものがミードの「現在の哲学」だと言うわけである (Joas, 1980, s. 165.)。

- (12) 物的対象に対する社会的反応という考え方は、「他者の観点から自己を捉え返す」という反省的構図が対象世界に関しても適応されうることを示している。すなわち、対象の位置から自己を捉えることによって経験主体としての自己と物的対象とは相互作用を行ない、それによって適切な反応を自己に呼び起こすことになる。つまり先に指摘したように、我々は他者のみならず外的な諸対象とも常に相互作用を行なっているわけである。
- (13) 以上の過程を支えているのがダイアディックなモデルにおける「シンボル」を媒介とした相互作用のメカニズムであったことから考えるならば、こうした説明は個々人の領域には妥当しても、それをそのまま社会次元にまで拡大して当てはめようとすればやはり齟齬をきたさざるをえない。ところがミードはこの「自我の進化・発展」という個体発生のメカニズムを、更に「社会の進化・発展」という系統発生のメカニズムに無媒介に関連させ、両者の関係を「相互関連的で相互依存的なもの」(MSS, p. 227. 邦訳 p. 251.) と規定したのである。
- (14) 「I」と「me」との結節点に「自我」が成立するが、それに応じて「自我意識 self-consciousness」もまた確立される。ミードは「意識」と「自我意識」を峻別しており、前者が単に経験界のみに係わっているのに対して後者は集団の反応を自己に呼び起こす能力、つまり自己を客観的に考慮しうる能力と関係するものと捉えている (MSS, p. 163. 邦訳 p. 174.)。
- (15) ミードは、共同体のすべての成員に対して普遍的な意味を持ちうる社会的な意味のシステムを「話想宇宙 universe of discourse」と呼んでいる。これは、ミードによって社会進化の結果到達しうるとみなされているコミュニケーションの理想形態であり、またこの基盤の上に、民主主義的共同社会が成立するとされる。以上の見解に対してT.W. ゴフは、「仮説的で偶然性をはらむ未来を、むしろ必然的な帰結であるかのごとく描く」ところにミード理論の矛盾点を指摘している (T. W. Goff, 1980, pp. 81-82. 邦訳 p. 156.)。論理面から捉えるならばそうした指摘も確かに正当ではあるが、この「話想宇宙」という概念自体はミードの社会的・実践的活動の中から導出されたものであるという点も、同時に見のがしてはならないと思われる。
- (16) この点については『批判理論』と言語」(『哲学』第73集, 1981年12月 pp. 151-178.) においてJ・ハーバーマスの「普遍語用論」の問題で論じておいた。

参考文献

Blumer, H.: (1966) "Sociological Implications of the Thought of George

- Herbert Mead”, In: *The American Journal of Sociology*, LXXI (March). pp. 535-544.
- Duncan, H. D.: (1967) “The Search for a Social Theory of Communication in American Sociology”, In: F. E. X. Dance (ed) *Human Communication Theory*, New York: Holt, pp. 236-263.
- 船津 衛: (1976) 『シンボリック相互作用論』 恒星社厚生閣.
- ・(1981) 「自我論の展開」(『東北大学文学部研究年報』 30号 pp. 61-114.)
- Goff, T. W.: (1980) *Marx and Mead, Contributions to a sociology of Knowledge*, Routledge & Kegan Paul (河村望監訳『マルクスとミード—知識社会学への寄与—』 御茶の水書房 1982.)
- Habermas, J.: (1974) “Universalpragmatische Hinweise auf das System der Ich-Abgrenzungen”, In: *Seminar: Kommunikation Interaktion Identität*, Suhrkamp. ss. 332-347.
- ・(1975) “Sprachspiel, Intention und Bedeutung zu Motiven bei Sellars und Wittgenstein”, In: *Sprachanalyse und Soziologie*, Suhrkamp. ss. 319-340. (真屋秀太郎訳「言語遊戯と志向と意味—セラーズとヴィトゲンシュタインのモチーフによせて—」, 『現代思想』 vol. 8-6. 青土社 1980. 所収)
- ・(1981) “Zur kommunikationstheoretischen Grundlegung der Sozialwissenschaften”, In: *Theorie des kommunikativen Handelns*, Bd. II. Suhrkamp. ss. 11-68.
- James, W.: (1907) *Pragmatism*, (eds.) Ch. Hartshorne and P. Weiss, Cambridge: Harvard University Press. (梶田啓三郎訳『プラグマティズム』 岩波書店 1957.)
- Joas, H.: (1980) *Praktische Intersubjektivität, Die Entwicklung des Werkes von G. H. Mead*, Suhrkamp.
- Mead, G. H.: (1932) *The Philosophy of the Present*, Chicago: University of Chicago Press.
- ・(1934) *Mind, Self and Society*, Chicago: University of Chicago Press. (稲葉・滝沢・中野訳『精神・自我・社会』 青木書店 1974.)
- ・(1936) *Movements of Thought in the Nineteenth Century*, Chicago: University of Chicago Press.
- ・(1938) *The Philosophie of the Act*, Chicago: University of Chicago Press.

- ・(1964) *Selected Writings George Herbert Mead*, (ed.) A. J. Reck, Chicago: University of Chicago Press.
- Meltzer, B. N.: (1964) “Mead’s Social Psychology”, In: (eds.) J. G. Manis and B. N. Meltzer, *Symbolic Interaction*. (Third Edit.), Allyn and Bacon, pp. 15-27.
- Miller, D. L.: (1973) *George Herbert Mead, Self, Language, and the World*. Chicago: University of Chicago Press.
- 南博: (1976) 『行動理論史』岩波書店.
- Natanson, M.: (1956) *Social Dynamics of G. H. Mead*, Washington: Public Affairs Press.
- Peirce, Ch. S.: (1905-a) “What Pragmatism Is”, In: *Collected Papers of Ch. S. Peirce*, Vol. V. *Pragmatism and Pragmaticism*, Cambridge: Harvard University Press. (山下正男訳「プラグマティズムとは何か」, 『世界の名著』48. 中央公論社 1968. 所収)
- : (1905-b) “Issues of Pragmaticism”, In: *Ibid.* (「プラグマティズムの問題点」, 同書 所収.)
- 佐藤 毅: (1972) 「プラグマティズムのコミュニケーション論」, 『現代日本のマス・コミュニケーション』1. 青木書店 所収.
- ・(1979) 「シンボリック相互作用論の自我論— G. H. ミードを中心として」 (『一橋論叢』二月号 pp. 1-22.)
- Skidmore, W. L.: (1975) *Sociology’s Models of Man*, New York: Gordon and Breach.
- 滝沢正樹: (1976) 「G. H. ミードのコミュニケーション論」, 『コミュニケーションの社会理論』新評論 所収.
- Theunissen, M.: (1965) “Das Ziel der transzendentalen Intersubjektivitätstheorie Husserls”, In: *Der Andere*, Berlin: Walter de Gruyter & Co., ss. 79-101. (鷲田清一訳「他者—フッサールの相互主観性理論のめざすもの—」, 『現象学の根本問題』8. 晃洋書房, 1978, 所収.)
- 鶴見俊輔: (1946) 「プラグマティズムの構造」, 『鶴見俊輔著作集』第一巻, 筑摩書房, 1975, 所収,
- ・(1950) 「プラグマティズム年代記」, 同書, 所収.
- ・(1956) 「折衷主義の哲学としてのプラグマティズムの方法」, 同書, 所収.
- 上山春平: (1968) 「プラグマティズムの哲学」, 『世界の名著』48. 中央公論社, 所収.